

巻頭言 「鬼が笑う」

宇野 元

新しいカレンダーや手帳。これから記してゆく白いページを眺め、世界は神秘に満ちていると思います。そして私たちは神秘の中を遍歴する者であると。2年前に亡くなったフランスの作曲家が、こんなことを言っていたのを思い起こします。人生は、一つ一つ扉をひらくようだ。一つの扉をひらくと、別の部屋がある。そして次の扉をひらくと、さらに別の部屋がある。日本人にとっては、襖を次々にあけてゆくイメージが重なるでしょう。襖をあけて、奥の部屋に入る。するとその向こうに襖がある。

いつも途中にある。またこんな連想が浮かびます。一つの扉の前に立つ。それにはかんぬきが掛かっている。戻れ！ と叫ぶ声。そこで別の扉の前にゆく。こちらはひらきそうだと胸を膨らませて。残念、よろこぶのは少し早かった。ひらくことができない。三つ目の扉をそっと叩いてみる。ひらかない。四つ目をどンドン叩く。空しく音が返ってくるだけ。五つ目の扉に思い切り体当たりする。びくともしない。いろいろな扉がある。荘厳な扉。華麗な扉。質素な扉。古風なあるいはモダンな扉。けれども、どう知恵を絞り、手を尽くしてもひらかない。奥にあるものを見ることはできない。

新しい年を迎えて、時の神秘を思います。自分の前にあることを知りたいと思う。自分にとって大切な人々の今年の歩みはどうなるのか知りたい。世界はこれからどう動いてゆくのだろうか？ そんな私たちを、鬼が笑う。先のことを色々と思いめぐらしはするが、実際には何も知りえない私たちを笑う。……

しかし、聖書は教えてくれます。私たちは神の御思いの中にあると。神の「御思い」は、私たちが何かを思うという以上の内容をもちます。それは力ある神の「心」を表わし、その中にあるとは、神が献身的に引き受けてくれているということです。私たちは担われています。新しい年、私たちはキリストにおいて示された神の愛のうちにあります。将来の不確かさをどうして恐れることがあるでしょう。

よき力に、誠実に、静かに囲まれ

守られて、思いにまさる仕方で支えられている。

だから、この日々を、あなた方と共に生きてゆこうと思います。

共に新しい年を迎えようと思います。

(ディートリヒ・ボンヘッファー)